学位請求論文　要旨

『日本古代における仏教者の山林修行』　小林　崇仁

目　次

序論
一、本研究の視座と課題 ―――― 1
（1）研究の対象 …… 1
（2）用語の確認 …… 2
（3）日本以前の仏教者の山林修行 …… 4
（4）古代における山林修行の概要 …… 6
（5）先行研究の動向 …… 9
（6）本研究の課題 …… 10
二、本研究の方法と構成 ―――― 11
（1）研究の方法 …… 11
（2）各章節の概要 …… 11

第一章　山林修行の先駆者たち

第一節　泰澄　―泰澄伝に見る山林修行者像―
はじめに ―――― 22
一、問題の所在 ―――― 22
（1）『泰澄和尚伝』の説く泰澄の人物像 …… 22
（2）先行研究における評価 …… 24
二、泰澄に関する別伝 ―――― 25
（1）異なる３系統の伝―『泰澄和尚伝』『法華験記』『本朝神仙伝』― …… 25
（2）３つの伝をふまえた僧伝―『元亨釈書』『真言伝』― …… 27
（3）そのほか中央の学匠・学僧による別伝 …… 28
三、泰澄の人物像 ―――― 30
（1）山林修行者 …… 30
（2）霊山開山者 …… 30
（3）遍歴修行者 …… 31
（4）神祇信仰者 …… 31
（5）密教信仰の先駆者 …… 32
（6）朝廷の護持僧 …… 32
（7）神仙的宗教者 …… 33
（8）法華経持経者 …… 33

おわりに ―――― 33

第二節　報恩　―報恩伝の史実性―
はじめに ―――― 38
一、報恩の動向 ―――― 38
（1）出自と出家 …… 39
（2）吉野での山林修行 …… 40
（3）観音呪の持誦 …… 40
（4）孝謙天皇の御病加持 …… 41
（5）内供奉十禅師 …… 43
（6）子嶋寺の建立 …… 44
（7）桓武天皇の御病加持 …… 45
（8）桓武天皇・皇后による子嶋寺への援助 …… 47
（9）吉野金峯山の宝塔建立 …… 47
（10）遍歴修行 …… 48
二、奈良期における報恩の位置 ―――― 49
（1）報恩伝承の学術的価値 …… 49
（2）当代における報恩の位置とその背景 …… 50
（3）後世への影響 …… 51
おわりに ―――― 52

第三節　満願　―神宮寺建立の背景―
はじめに ―――― 57
一、満願の足跡とその特徴 ―――― 57
二、八世紀における神宮寺建立の一背景 ―――― 59
（1）問題の所在 …… 59
（2）八世紀の神仏習合に関わった山林修行者に共通する特徴 …… 61
（3）八世紀に各地で神宮寺が建立された背景 …… 62
おわりに ―――― 63

第二章　朝廷による山林修行者への信仰と支援

第一節　施暁　―施暁の奏上と梵釈寺の造営―
はじめに ―――― 67
一、施暁の事績 ―――― 68
（1）朝廷への奏上 …… 68
（2）僧綱への補任 …… 68
（3）施暁の周辺 …… 70
二、梵釈寺造営の経緯 ―――― 71
（1）梵釈寺の造営 …… 71
（2）梵釈寺に関わった僧たち …… 72
（3）藤原百川をめぐる因縁譚 …… 73
三、「施暁の奏上」と「梵釈寺造営の詔勅」 ―――― 74

（1）光仁・桓武期における僧綱の理念と天皇の仏教観 ……74
（2）施暁の奏上 ……76
（3）梵釈寺造営の詔勅 ……76
四、桓武期の仏教政策と梵釈寺 ――77
（1）僧尼の才徳を高める政策 ……77
（2）寺家の勢力を押さえる施策 ……79
五、梵釈寺の機能 ――80
おわりに ――82

第二節　玄賓　―嵯峨天皇からの殊遇―
はじめに ――90
一、玄賓の生涯 ――90
（1）誕生～出家 ……91
（2）伯耆国の山へ入る ……92
（3）桓武天皇の御病平癒を祈る ……93
（4）度人を賜る ……94
（5）大僧都に補任される ……94
（6）僧綱を辞し備中国に遁去する ……94
（7）嵯峨天皇よりの殊遇 ……95
（8）玄賓が住した郷の租庸の軽減 ……95
（9）遷化 ……96
二、嵯峨天皇よりの殊遇の状況 ――96
（1）嵯峨天皇よりの施物 ……96
（2）嵯峨天皇の玄賓への尊敬の念 ……100
三、嵯峨天皇親書よりみた玄賓の人物像 ――102
（1）玄賓へ贈られた親書や御製詩 ……102
（2）玄賓の人物像 ……103
（3）光仁期以来の為政者が期待した僧尼のあり方 ……104
（4）「公廬山栖心襄陽晦跡」の解釈をめぐって ……106
おわりに ――107

第三節　聴福　―玄賓との類似性―
はじめに ――112
一、聴福の事績 ――112
（1）度者を賜る ……112
（2）紀伊国伊都郡に三重塔を建立 ……116
（3）嵯峨天皇より親書と施物を賜る ……119
二、玄賓との共通点 ――120
おわりに ――120

第三章　山林修行者による社会的実践行　―自利から利他へ―

第一節　勝道　―日光山開山の意義―

はじめに ―――126
一、『勝道碑文』のテキスト ―――127
二、勝道の略歴 ―――128
三、日光山登頂を試みるまでの青少年期 ―――130
（1）勝道の出自 ……130
（2）沙弥・比丘としての勝道 ……130
（3）勝道の宗風 ―天台と華厳の可能性― ……132
四、日光山山頂をめざした登頂期 ―――133
（1）葱嶺に譬えられた日光山 ……133
（2）日光山山頂遺跡の解釈 ……134
（3）蝦夷問題をめぐって ……135
（4）補陀落山と二荒山 ……137
（5）山神への畏怖と入山の作法 ……138
（6）山頂における三七日の礼懺 ……139
（7）礼懺による神祇供養 ……143
五、南湖畔に神宮寺を建て住した修行期 ―――145
（1）修行の勝地としての山中浄土 ……145
（2）神宮寺の機能 ……147
（3）神宮寺での修行 ……149
六、その後の利他弘道期 ―――149
（1）仏教の指導者・布教者・験者としての勝道 ……149
（2）勝道の示寂 ……151
おわりに ―――152

第二節　徳一　―東国に垂迹した菩薩―
はじめに ―――164
一、徳一の事跡 ―――164
二、菩薩の種々相 ―――166
（1）菩薩とは ……166
（2）問題の所在 ……168
（3）菩薩と称された僧尼たち（行基・金鷲・永興・寂仙・舎利） ……169
（4）菩薩と称された僧尼たちの特徴 ……172
三、徳一の菩薩行 ―――172
（1）持戒 ……172
（2）修学 ……173
（3）山林斗藪・修禅 ……174
（4）造寺 ……174
（5）写経 ……177
（6）授戒 ……177
（7）講経 ……179
（8）東行（仏の化現） ……180
おわりに ―――181

第三節　勤操　―官大寺僧の幅広い実践行―
一、誕生・幼少期 ―191
（1）生年 ……191
（2）出自 ……191
（3）明星入懐 ……192
（4）父親早世 ……194
二、修行期 ―194
（1）出家 ……194
（2）得度 ……196
（3）山林修行 ……197
（4）受具足戒 ……201
（5）三論修学 ……201
（6）二利双修 ……204
小結　―誕生から修行期― ―205
三、賜度者 ―桓武天皇の看病― ―216
四、御斎会 ―217
五、僧綱 ―律師・少僧都・大僧都― ―218
六、造東寺所別当・造西寺所別当 ―221
七、川原寺別当 ―222
小結　―朝廷との関わり― ―224
八、三千仏名 ―232
（1）仏名会 ……232
（2）大通方広法 ……233
（3）『三千仏名経』と『方広経』 ……233
九、法華八講 ―235
（1）岩淵寺の法華八講 ……235
（2）法華経講会の沿革 ……236
（3）八巻本による追善の講会　―西寺における法華八講― ……237
（4）法華八講の広がり　―橘寺さらには村堂における法華八講― ……238
（5）官大寺僧による私的な法華経講会 ……239
十、文殊会 ―241
（1）勤操と泰善による私的な文殊会 ……241
（2）公的な文殊会の展開 ……242
十一、築池事業 ―243
（1）狭山池 ……243
（2）平安初期における築池事業と僧侶 ……244
小結　―利他行への展開― ―245
おわりに ―247

第四章　山林修行の種々相

第一節　斗藪　―勝道と徳一と空海の共通点―
はじめに ―254

一、勝道・徳一・空海、三者の共通点 ―――――――――――――――――――――254
二、日本古代における斗藪とは　－三者の事跡を通じて－ ――――――――――255
（1）インド初期仏教における頭陀行 ……255
（2）斗藪の諸相　－去来・水菜・薜蘿－ ……256
（3）斗藪のめざすもの ……257
（4）斗藪から修禅へ ……258
（5）仏道修行における斗藪の位置 ……259
（6）山林修行の功徳 ……259
おわりに ―――――――――――――――――――――――――――――259

第二節　乞食と蔬食　―山林修行の経済基盤―
はじめに ―――――――――――――――――――――――――――――263
一、乞食 ―――――――――――――――――――――――――――――265
（1）インドにおける乞食行 ……265
（2）律令下での乞食行 ……266
（3）行基教団にとっての乞食　―三階教との関係― ……268
（4）『霊異記』に見る乞食①　―迫害を受ける乞食者― ……270
（5）『霊異記』に見る乞食②　―生活のための乞食― ……271
二、蔬食 ―――――――――――――――――――――――――――――273
（1）山林修行者の衣食 ……273
（2）中国仏教における蔬食の隆盛 ……274
（3）日本における服餌・蔬食の実状 ……276
三、「乞食」「蔬食」は山林修行の資糧たり得たか ――――――――――――279
（1）法会の禁止による山林修行の衰退 ……279
（2）梵釈寺の世俗化 ……280
おわりに ―――――――――――――――――――――――――――――281

結論
はじめに ―――――――――――――――――――――――――――――289
一、朝廷による山林修行者への信仰と支援 ――――――――――――――――289
（1）多羅禅師の行状　―浄行・看病― ……289
（2）山林修行と看病に関する規定と禁制 ……290
（3）浄行者の重視　―招請・得度・看病禅師― ……290
（4）「浄行」の場としての山林 ……290
（5）山林修行者への尊信的な支援―嵯峨天皇と玄賓― ……291
（6）山林浄処での祈願 ……291
（7）朝廷による山寺の経営―桓武天皇と梵釈寺― ……292
二、山林修行者による社会的実践行 ――――――――――――――――――292
（1）山林寺院における私的な法会の禁止 ……292
（2）民衆への看病・布教 ……293
（3）深山での修行 ……293
（4）神祇への供養 ……293
（5）道俗知識による山寺の経営―多度神宮寺― ……294

三、菩薩行としての山林修行 ―――――294
（1）避世出塵と護国利人 ―菩薩の精神― ……294
（2）山林修行の功徳 ……295
（3）修験道への連続性 ……295
おわりに ―――――296

初出一覧 ―――――300

論文の概要
（4000 字以内）

本研究は、日本古代、特に奈良時代から平安時代初期における仏教者の山林修行について、仏教学の立場から論述したものである。

仏教者が山林にて修行することは、古来より行われた。仏教の開祖釈尊は、インドの伝統的な修行者の行状を踏襲し、出家して間もなく白善山の山窟に坐すとともに、家ごとに食を乞うて托鉢をしたという。閑居と乞食という修行形態は、初期仏教において「頭陀」として確立した。頭陀の徳目の第一は「阿蘭若」に住することであった。阿蘭若とは森林や原野を指し、乞食に支障がない程に、集落から離れた静寂な場所を意味する。さらに大乗経典にも、山林にて修行する者が多く描写され、また山林を修行の適所とする記述も散見される。特に仏教が中国に伝来すると、中国における山岳信仰や神仙思想とも相俟って、仏教者の山林修行はより盛んとなった。インドで重視された乞食を主体とする「頭陀」も、中国では断崖や茂みを意味する「斗藪」と漢訳され、出家者の修行形態として、乞食よりむしろ山居が重視された。

さて日本では奈良期の律令体制において、仏教者の山林修行は『僧尼令』に規定され、正式な手続きによる僧尼の山林修行が認められていた。また奈良期を通じて、朝廷は無許可での山林修行を禁ずる法令を出しており、私的な山林修行もよく行われたと推察される。その身分も僧尼をはじめ、沙弥や優婆塞、私度など様々であり、平安初期に成立した『日本霊異記』には、それを示唆する説話が散見される。また朝廷は、優れた山林修行者に布施をし官度を許すなど、尊信的な施策も行っている。特に奈良末期平安初期にはその傾向が高まり、光仁期には山林修行の解禁と十禅師の設置、桓武期には山林浄域への梵釈寺の造営などがなされた。山林にて修行する仏教者も増えたと見え、この時代を牽引した僧たちが積極的に山林修行や山寺経営に関わった。

日本古代の山林修行に関しては、和歌森太郎氏の山岳信仰に関する研究、堀一郎氏の山林優婆塞に関する研究、古江亮仁氏の山寺に関する通史的研究など、多くの蓄積がある。特に薗田香融氏は南都僧の山林修行の意義について論じ、奈良仏教を代表する学僧らは、虚空蔵求聞持法を修して自然智を得ることを目的に、吉野比蘇山寺をはじめとする山寺にて修行しており、その呪術性は学解中心の国家仏教を支える基盤であったとした。薗田氏の指摘は定説となっているが、すでに前谷彰・恵紹氏がその誤謬を指摘したように、比蘇山寺を中心に「自然智宗」なる山林修行の一派が形成されていたとは考えにくく、僧たちの山林修行に関する具体的な論拠が不確かなまま、その結論だけが援用されている傾向にある。

ただし先行研究にて示されたように、奈良期において山林修行を実践した仏教者が存在したことは確かであり、いわゆる自然智宗とは別の事例を精査する必要がある。また山林修行に関する社会史学的あるいは考古学的視点による研究は進展したものの、宗教的な文脈における理解、つまり山林修行の主たる実践者であった僧たちの信念や目的意識、あるいはそれを護持した為政者や諸人の仏教信仰、さらには仏教史全体か

ら見た当時の山林修行の特徴など、仏教学の視点からの考察は必ずしも充分とは言えない。

そこで本研究では、先行研究であまり取り上げられていない代表的な九名の山林修行者（泰澄、報恩、施暁、玄賓、聴福、満願、勝道、徳一、勤操）に注目し、諸史料をもとに、彼らの生涯をたどる人物研究を重ね、当時の山林修行の様相と意義を論ずることとした。

第一章では、奈良期に山林修行を行ったと伝承される僧のうち、先駆的な位置にある泰澄、報恩、満願の三者を取り上げた。

泰澄は奈良前期に北陸の白山を開いたとされる僧である。泰澄伝の史実性は、すぐさま判断はつかないが、およそ奈良末期において山林修行者の典型となる要素を多分に含み、古代の山林修行者像を考察する上で、参考とすべき人物であることを指摘した。

報恩は奈良中後期に吉野山を中心に長く山林修行をし、天皇の病気を治癒して信任を得たとされる僧である。報恩伝の史実性は高く、当時の為政者や諸人が期待したような、山林修行によって清浄性と呪術性を得た僧であり、光仁・桓武前期を代表する僧のひとりと位置づけた。

満願は諸国を遍歴し、鹿島や箱根や多度などに神宮寺を建てた僧である。仏道修行のために山林の霊地に入った者にとって、山林に住む神祇は自然的障難を与える畏怖すべき存在であった。修行者は、神祇を鎮めて喜せしめ、その加護を得るべく、神祇のための読経や写経、さらには神宮寺の建立を発願した可能性を論じた。また在地の人々にとっても神祇は脅威であり、地域の安定を願い、仏教者の山林修行と神祇供養を支援したものと推察した。

第二章では、山林修行を通じて朝廷から信任を得た僧のうち、代表例となる施暁、玄賓、聴福の三者を取り上げた。

施暁は山林修行に関する奏上を行った僧で、桓武期を代表する山寺である梵釈寺の初代住持に就いたとされる。施暁の奏上と梵釈寺造営の詔勅を考察した結果、仏教者は自他の菩提を求めて山林修行を志し、天皇にその支援をもとめ、また天皇も仏法による利益を願って、仏教者の山林修行を外護するという、両者の相依関係が窺えることを指摘した。

玄賓は長く伯耆や備中にて修行し、嵯峨天皇から篤く信奉された僧である。嵯峨天皇の玄賓に対する傾欽と殊遇は、古代において特筆すべきことを指摘した。また当時の為政者たちは、山林修行者の出世間性に敬意を表し、また呪術性に期待を寄せていたことを明らかにした。

聴福は桓武天皇の不豫平癒のために紀伊国伊都郡に三重塔を建て、嵯峨天皇から信奉された僧である。聴福も玄賓と同様に、為政者や諸人が期待したごとくの高僧、つまり仏道修行に懈怠ない有行有徳の僧であったことを確認した。

第三章では、山林修行に続いて広く利他の実践を行った僧のうち、代表例となる勝道、徳一、勤操の三者を取り上げた。

勝道は下野の日光山を開いた僧で、後に上野国講師や寺院建立、日光山での祈雨など様々な活動を行っている。山林修行を契機として利他行に励む勝道の人物像は、自利利他円満という大乗仏教の信念を体現した菩薩と称するに相応しいことを論じた。また霊山に入って自利行を積み、再び世俗に還って利他行に励むというあり方は、最澄や空海、さらには後の修験道にも引き継がれており、勝道による日光山開山は、こ

うした構図の先例となることを指摘した。

徳一は法相学僧として名高いが、彼は若くして東国に斗藪し、磐梯山慧日寺を建立するなど教化につとめ、菩薩と称された。当時の人々は修行者の利他行のみならず、持戒・山林修行・修学などの自利行にある種の超越性を認め、戒定慧に裏付けられた自利行が、広く利他行へと展開する姿を、仏の化現、つまり衆生済度のために現世に現れた菩薩として信奉していたことを指摘した。徳一もまた幅広い自利利他の徳行により、東国に垂迹した菩薩として尊崇を集めたものと推論した。

勤操は僧綱に列した当時を代表する三論学僧であるが、彼も若くして吉野山に修行し、さらに法会の執行や困窮者の済度、築池の事業など、朝野にわたる多様な活動を行っていた。勤操の事績には日本初例となるものも多く、種々なる菩薩行に励んだ勤操は、平安期に広まる仏教信仰の基礎を築いた人物のひとりであったと位置づけた。

第四章では、山林修行に関する二つのトピックを取り上げ、日本古代における山林修行の特徴を考察した。

一つは徳一・勝道・空海に共通して見られる「斗藪」という形態を取り上げた。霊地を求めて山林を跋渉する斗藪は、本寺や山寺に止住しての修学や修禅と共に、仏道修行の重要な一側面とされていたことを指摘した。

二つは山林修行の財源や食事法に注目した。インドや中国では「乞食・蔬食」がよく見られるが、古代日本においてこれらは積極的に実践されなかった可能性がある。日本の山林修行は、世間と断絶した形では存続しえず、多分に社会性を帯びたものであり、国家に認められた田地や供料、あるいは檀主の依頼による法会の布施など、社会的な経済基盤によって継続し得た可能性を指摘した。

最後に本研究の総括として、当時を代表する仏教者の行状を参考に、朝廷との関わり、社会への広がり、僧侶の信念という観点から改めて古代の山林修行を概観し、以下のような結論を得た。

奈良末平安初期において、玄賓や施暁や勤操など僧綱に任ぜられた僧、さらには徳一や勝道など東国で活動した僧ほか、当時の仏教を牽引した深志ある僧たちは、山林にて仏道修行に励んでいた。当時の山林修行は、自他の菩提を求める菩薩行の一環とみなされており、仏教者は出世間を志して山林の霊地に入り、さらに修行で培った功徳や験力をもって、世間にて利他の実践を行った。朝廷はそうした山林修行者の清浄性と呪術性を信奉し、国家の安定や衆生の菩提を期待して経済的に支援した。また修行者の自利利他にわたる行状に触れた人々は、優れた修行者を菩薩と称して尊崇した。山林や世間における仏教者の幅広い活動は、それを受容する人々の信仰や思惑と相俟って、古代社会に大乗仏教が浸透する契機となった。

なお山林修行は、平安初期に樹立した天台宗と真言宗においても重視され、さらに後世の修験道へと展開していく。本研究によって得られた成果は、最澄や空海の仏教や修験道の特質、さらにはその影響を受けた日本社会の宗教性を理解する上でも参考になるものと考える。